

2012年 11月16日

未来への扉

高等特別支援学校 支援部 第43号



秋も深まり、山々がきれいに色づいています。今年は寒くなるのが早く、ただでさえ短い「三田の秋」は足早に冬へと歩を進めているようです。

2学期も後半、3年生は就職に向けてよりいっそう緊張感が増してきました。体調を崩しやすい時期でもあります。健康管理も重要な仕事のひとつ。毎日笑顔でがんばれるように、まずは自分の体との対話を大切に。

さて、今回の「未来への扉」は学年支援部大村先生からのメッセージです。 (聳城)



全国障害者スポーツ大会を終えて

10月13日～15日に岐阜県で開催された「ぎふ清流大会」に兵庫 WAVES がバレーボール(知的の部)に出場しました。兵庫 WAVES というチームは、本校を卒業した OG メンバーと女子バレーボール部に所属する現役生メンバーとで構成されたチームです。日頃から OG が現役生の面倒をよく見てくれ、現役生も先輩に色々な相談にのってもらおう等、バレーボールとい

うスポーツを通して、人として成長できる場でもあります。そのチームに顧問として関わらせてもらっている私が、この4年間で感じたことをお話ししたいと思います。



バレーボールは、サーブ・レシーブ・スパイクなどの技術を組み合わせてゲームを進めていくのですが、『誰がミスをしたのか』が一目瞭然になってしまうスポーツです。ミスをした時にその『誰か』を責めることは簡単で、ついついやってしまいがちになるものです。試合が競っている状況になれば、一層、自分の感情をその『誰か』にぶつてたくなります。

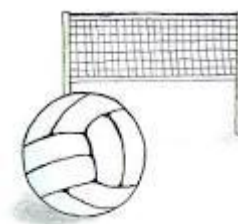
しかし、4年前の選手達はミスをして誰も責めることなく、「どんまい」と言っていたのです。私はその光景を見たとき、「みんな優しいなあ、えらい」と思いました。が、月日が経つにつれ、「あれ？なんかおかしい」と感じるようになったのです。1人1人が自分の役割を理解し、それを果たそうとする集まりがチームであって、そのチームの決められた約束事を『誰か』が守ろうとしなかった時、「悔しい」とか「なんでやねん」という感情がでてきてもおかしくないはずです。「どんまい」と言って、慰めるだけは不自然じゃないか？そう感じたのです。それを選手に伝えた時、「なんでミスするねんって思うけど、それを言ったら次自分もミスをできなくなるから怖い」と言いました。それからチームで話し合い、自分のプレーに責任をもつこと。互いに認め合い、励ますこと。注意やアドバイスをし、自分たちで雰囲気を作り上げていくこと。を選手たちは決めました。



自分たちでチームを作ることは、簡単ではありません。相手のことを思って言った言葉が原因でぶつかったり、落ち込んだり、自分の考えていることを上手く伝えられずに泣いたり、本当にいろいろとありました。それらを積み重ね、選手たちは日々成長しています。その成長はとてもゆっくりとしたものかもしれませんが、確実に。

4年目の今年、「ぎふ清流大会」での選手たちに成長を感じることができました。コートの中でとても嬉しそうに笑う顔や悔しい顔、コートの外から必死に声を出している姿、どれも成長した選手たちだからこそ、できることなんだと胸が熱くなりました。それと共に、いまこの選手たちと一緒に、この舞台にいられることを誇りに思いました。そして、目標にしていた全国優勝ができなかった時の、選手たちの涙は忘れられません。「また来年。必ずこの舞台に戻ってこよう。」チームの全員がそう、心に決めました。

「負けたら意味がない」と言われる方もいます。確かにそうかもしれません。でも、結果だけではなく、目標に到達するまでのプロセスも大切にしていきたいと思います。なぜなら、選手たちが周りの人たちの力を借りながらも、自分たちで変わろうとする姿そのものに意味があり、価値があると気付かされたからです。自分たちのペースで、自分たちらしいバレーボールをしながら、全国優勝というチームの目標を遂げたいと思います。 (第1学年支援部 大村)



～ご意見・ご感想をお寄せください～

「未来への扉」のご感想やご意見、取り上げてほしいテーマなどのご希望をお寄せください。担任を通じて、もしくは直接支援部まで。お待ちしております。

